様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　４ 月　６ 日現在

機関番号：１６４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2022
課題番号：１５Ｋ０２５１９

研究課題名（和文）アブロン語の記述研究およびアカン語との比較研究

研究課題名（英文）Descriptive study of Aburon and comparative study with Akan

研究代表者
古閑　恭子（Koga, Kyoko）

高知大学・教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門・教授

研究者番号：９０３０６４７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：出産・育児休暇及びコロナ禍で、予定していた現地調査がほとんどできなかった。その代わりに、日本に在住するアフリカ人に協力いただき、アカン語の調査を行った。その成果として、学会発表７件、著書（共著含む）５件、論文発表７件を行った。特に、本研究を含めて長年取り組んできたアカン語の語彙集及び、アカン語研究成果物として言語学テキストを刊行することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究成果の一つとして、言語学テキストを刊行した。これまでになかったアフリカのマイナー言語を主な素材としたテキストである。また、2022年より東外大オープンアカデミーの「アカン語」をネイティブスピーカーと一緒に担当している。受講生は主に協力隊・研究者で、研究成果が社会貢献につながっていると思う。2022年には、高知大学でもネイティブと一緒にアカン語の集中講義を行った。アフリカのマイナー言語を学ぶことで言語文化の多様性や珍しい現象に興味を持ってもらえたと思う。

研究成果の概要（英文）：Due to maternity and parental leave and the Corona disaster, I was unable to conduct most of planned field research. Instead, I conducted research on the Akan language with the help of Ghanaians living in Japan. As a result, I made 7 presentations at academic conferences, published 5 books (including co-authored), and presented 7 papers.

研究分野：言語学

キーワード：アカン語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

私はこれまでガーナに話されるアカン語（ニジェール・コンゴ語族）の記述研究を行ってきた。アカン語はガーナ最大の現地語、共通語である。博士論文を中心に研究を進めてきたが、一方、アカン語と系統的につながる諸言語は、ほとんど手がつけられていない。そのため、これまでのアカン語研究の知見を生かし、未調査のアカン諸語の研究に着手しようと考えた。

２．研究の目的

本研究の当初の第一の目的は、アブロン語の記述研究である。アブロン語は、主にガーナ共和国に話される現地語の 1 つで、系統的にはニジェール・コンゴ語族クワ語派タノ小語群アカン諸語に分類される。現時点で消滅の危機にはさらされていないものの、ガーナ最大の部族語であり共通語であるアカン語の影響を受け、アカン語への乗り換えも進んでいる。アブロン語の文法書、語彙集など基礎研究は皆無であり、言語保存の観点からアブロン語の調査記述が急務である。

第二の目的は、研究代表者がこれまで記述研究してきたアカン語との比較研究である。アカン語研究において、特に声調、母音調和の面で解明されていない課題も少なくない。同じアカン諸語の言語であるアブロン語との比較・対照研究により、こういった未解決の課題に取り組む。

３．研究の方法

アブロン語が話されるガーナ共和国ブロン・アハフォ州にて現地調査を行う予定であった。具体的には、基礎語彙を収集し、データ化する予定であった。しかし、2016 年より産休・育休に入り、研究を中断・延長した。さらに、研究を再開しようと思った矢先にコロナ禍に見舞われ、現地調査を断念せざるを得なくなった。2020 年、2021 年、2022 年と３年間、現地に行けない状態が続き、やむを得ず、当初の目的を変更し、日本に在住するガーナ人の知り合いに協力いただき、アカン語の調査を行った。同時に、これまで蓄積されたデータを整理し、論文化、書籍化を行った。

４．研究成果

３．に述べたように、予定していた現地調査の代わりに国内ネイティブを対象とした調査、及びこれまで蓄積してきたデータの整理を中心に行った。その成果として、本研究期間内に、学会発表７件、著書（共著含む）５件、論文発表７件を行った。そのうち重要なものを以下に挙げ、その概要を記す。まず、本研究を含めて長年取り組んできたアカン語の語彙集を刊行することができた。これは、主に博士課程でアカン語を調査して得られた基礎語彙データを、2 年ほどかけて整理・編集して完成したものである。基礎語彙を意味順に、22 のメイングループに分類して掲載した。

An Akan Vocabulary (Asian and African Lexicon 60), ILCAA Tokyo University of Foreign Studies, 2019.

また、アカン語を主な素材とした言語学テキストを刊行した。これまでになかったアフリカのマイナー言語を主な素材としたテキストである。ヨーロッパやアジアの言語には見られない珍しい特徴にも触れつつ、音声学、音韻論、形態論、統語論など言語学の基本をカバーしつつ、フィールド言語学の手法、言語の変種、言語の変化、一つの言語とは何かなど、社会言語学的テーマまで幅広く扱った。

『フィールドワークではじめる言語学―なじみのない言語から考える』ひつじ書房，2022.

その他、アカン語の声調、情報構造をテーマにした論文・学会発表を行った。以下は、アカン語の名詞の声調の振る舞いをまとめたものである。

「第３章 アカン語の声調の振る舞い―名詞の場合」梶茂樹他『アフリカ諸語の声調・アクセント』，アジア・アフリカ言語文化研究所，2021.

以下は、研究の少ないアカン語の情報構造を扱った学会発表である。アカン語の焦点表現は形態統語的側面の研究が主で、韻律的側面を扱う研究はほとんどない。焦点は焦点標識 na を伴いかつ文頭に置かれることによって表される。この焦点構文は独特な韻律的特徴を持つが、このことに触れる研究はわずかでかつ通常と異なることを指摘するに留まっている。本発表では、na 焦点構文の韻律的特徴について 1 次資料を提示し体系的に検討する。この韻律的特徴は音声現象でなくＬからＨへの音韻変化（声調変化）であり、従来の指摘と異なり述語全体でなく述語頭の１音節のみに起こる変化であることを示した。

アカン語の na 焦点構文の韻律的特徴，日本言語学会第 165 回大会，2022.

経済学者と共同でアカン語使用を言語経済学的に取り上げた学会・論文発表も行い、ガーナの言語政策をテーマに国際学会発表も行なった。以下の国際学会発表では、英語公用語のガーナで、現地語共通語のアカン語の読み書き能力がいかに家庭にリターンをもたらしているかを国勢調査のデータを用いて提示した。

Does Akan literacy influence household's income? Allied Social Associations 2020 Annual Convention, San Diago.

また以下の国際学会発表では、政府の学校教育における言語政策が不安定であることが、他言語国家であるガーナにおいて英語格差をますます大きくしていることを述べた。

English divide and medium of instruction policy implementation in Ghana, 17th Annual Conference of the International Association of Urban Language Studies, Xi'an, 2019.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Samuel Amponsah and Kyoko Koga	４．巻 23(2)
２．論文標題 Does Akan Literacy Influence Households' Income?	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Journal of African Development	６．最初と最後の頁 207-240
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 古閑恭子	４．巻 97
２．論文標題 ンゼマ語の可譲渡／不可譲渡名詞	５．発行年 2019年
３．雑誌名 アジア・アフリカ言語文化研究	６．最初と最後の頁 5-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 古閑恭子	４．巻 18
２．論文標題 言語調査における問題について－ガーナでの言語調査の経験から	５．発行年 2017年
３．雑誌名 国際社会文化研究	６．最初と最後の頁 133-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Koga Kyoko	４．巻 10
２．論文標題 Event integration in Akan	５．発行年 2016年
３．雑誌名 アジア・アフリカの言語と言語学 (Asian and African languages and linguistics)	６．最初と最後の頁 .179 -195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 古閑恭子
2．発表標題 アカン語の自然発生的状態変化を表す動詞の構文交替
3．学会等名 東京アフリカ言語学会
4．発表年 2021年

1．発表者名 Samuel Amponsah and Kyoko Koga
2．発表標題 Does Akan literacy influence household’s income?
3．学会等名 Allied Social Associations 2020 Annual Convention（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 古閑恭子
2．発表標題 アカン語における自然発生的状態変化を表す動詞の構文交替
3．学会等名 日本言語学会第160回大会
4．発表年 2020年

1．発表者名 Kyoko Koga
2．発表標題 English divide and medium of instruction policy implementation in Ghana
3．学会等名 17th Annual Conference of the International Association of Urban Language Studies（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Samuel Amponsah, Kyoko Koga
２．発表標題 Does Akan literacy influence households’ income?
３．学会等名 Allied Social Associations 2020 Annual Convention（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 古閑恭子
２．発表標題 アカン語における自然発生的状態変化を表す動詞の構文交替
３．学会等名 日本言語学会第160回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Amponsah and Koga
２．発表標題 Akan literacy and earnings in Ghana
３．学会等名 Western Economic Association International 15th International Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 古閑恭子	４．発行年 2022年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 198
３．書名 フィールドワークではじめる言語学	

１．著者名 Kyoko Koga	４．発行年 2019年
２．出版社 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	５．総ページ数 229
３．書名 An Akan Vocabulary	

１．著者名 古閑恭子	４．発行年 2016年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 4
３．書名 世界の名前	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関